罪悪感に関する最近の研究動向[1)]

有　光　興　記

（受付　2001年5月10日）

罪悪感は，うそをついたとき，人を傷つけたときなどさまざまな状況で経験される。罪悪感は，日常生活において誰もが経験する情動であるにも関わらず，臨床心理学を中心とする理論が先行しており，実証研究が立ち後れていた。しかし近年，欧米を中心に尺度開発が行われ，罪悪感の性質が明確になってきた。そこで本論文では，特に罪悪感の理論と測定方法に焦点を当て，諸研究を概観し，今後の展開を探ることを目的とする。

第1節　罪悪感の定義

辞書的に“罪悪”とは，“道徳や宗教の教えなどにそむく行い。悪事”という意味である（広辞苑）。英語の訳語としては，guiltが相当する。guilt（罪悪感）[2)]とは，後悔，良心の呵責，悪いことをしてしまったことへの失望を意味する（Tangney, Wagner, Fletcher, & Gramzow, 1992）。罪悪感を経験すると，一般的には特定の宗教，道徳上の罪（transgression）に関して脅迫的に考え，違った行動をとるべきであったと思い，できることなら自己の行いをやりなおしたいと思う（Tangney, Burggraf, & Wagner, 1995）。さらに，guiltは何らかの方法で，ある標的に対して起こった害（harm）をやり直す行動を動機付ける可能性がある（Baumeister, Stillwell, & Heatherton, 1994）。罪悪感の喚起により向社会的行動を行う機能は，共感主導（empathy guided; 他者への責任感，自責感など）の場合は促進され，

1）本稿は日本発達心理学会第10回大会でのラウンドテーブル“罪悪感に関する研究”（企画者・二宮克美）において発表された内容をまとめたものである。

2）訳語の是非は不明であるが，以下は便宜上「guilt」を「罪悪感」，「shame」を「恥」と翻訳することとする。

恐怖駆動（fear driven; 罰への恐怖など）の場合は干渉を受け，必ずしも行動化されない（Zahn-Waxler & Kochanska, 1990）という。

第 2 節　罪悪感に関する理論

罪悪感に関する心理学的理論としては，発達過程，生起因および帰結に関するものに 3 分できる。発達過程における罪悪感の発生に関するものとして，Freud（1924）の精神力動的理論，Erikison（1959）のアイデンティティ理論，Homan（1984）の共感性発達理論，Lewis（1992）の自己意識的情動（self-conscious emotion）の発達理論があげられる。罪悪感の生起因としては，自己に関わる認知をあげる研究者が多い（Buss, 1980; Higgins, 1987; Lewis, 1992; Roseman, Antoniou, & Jose, 1996）。罪悪感の帰結に関する理論としては，Darwin（1872）をはじめ多くの研究者がその適応的機能について述べ（Baumeister, Stillwell,& Heatherton, 1994; Tangney et al., 1995），道徳行動の促進，攻撃性の抑制，性行動の抑制などの機能が実証されている（Mosher, 1979）。また，罪悪感を外的にあるいは内的に表示する身体変化は完全に確認されていないが（Izard, 1991），自覚される罪悪感経験の内容については Tangney, Miller, Flicker, & Barlow（1996）が明らかにしている。一方，罪悪感と精神病理の関係については，Freud（1924），Lewis（1971）や内沼（1997）などが，恥（shame）[2] や攻撃性との関連で理論化している。

1.　罪悪感の発達理論

心理力動的理論　精神力動的理論では，子供と養護者の関係に重点を置き，幼児期後期における性役割の発達に伴い，近親姦的な願望が肥大化し（たとえば，男子は母親と結婚したいと思い，関係を父親と競う），嫉妬のこもった怒りが起こり，自分がしてはいけないことをしている悪い子であるという罪悪感が生まれるという（Freud, 1924）。すなわち罪悪感は，ねたみ，嫉妬，憤激，憎しみなどの動機に対する道徳命令から生まれる。この

考えでは，人が反社会的動機によって動機づけられる場合，良心もしくは超自我の発達が困難になる。

アイデンティティ理論　Erikson（1959）の自我統合に関する心理社会的発達理論によれば，恥や罪悪感などの道徳感情はアイデンティティの感覚に直接的影響を与える（Lynd, 1958）。罪悪感は，幼児期の自主性に対する反面の感情であり，自分の誤った行動に焦点を当てることで生まれる（Erikson, 1959）。同一性達成をした人は，自己の誤った行動を進んで修復し，責任をとろうとするため，罪悪感を経験しやすい（Lutwak, Ferrari, & Cheek, 1998）。一方，恥は自己統制ができないという感覚から生まれ，自分を未熟で愚かな人間と考え自己疑問を強調する。また，恥は傷ついた自己の修復を要求するために自我同一性達成は困難となり，恥をよく経験する人は同一性拡散傾向にある（Lutwak, et al., 1998）。

共感性発達理論　Hoffman（1984）は，罪悪感を道徳的行動の動機の１つとして捉え，その発達過程を理論化している。Hoffman（1984）によれば，観察者である自分が，他者の苦しみは自分のせいだという自己非難の帰属をした場合，観察者の共感的苦しみが罪悪感に変化する。自分が他者を傷つけたことを意識したとき，自分自身について持つ感情が罪悪感である。他者への共感から罪悪感が喚起されるため，罪悪感は共感と平行して４つの発達段階をもって発達する。罪悪感は，(1) 他者の痛みの単純な表現，(2) 他者の身体的外傷，(3) 他者の不快感情，(4) 他者の一般的苦しみという段階を経てその対象が広範囲に発達する。したがって，罪悪感は他者への共感性の発達が前提となり，共感性の４つの発達段階：(1) ばくぜんとした共感（０歳～），(2) 自己と異なる物理的存在への共感（１歳～），(3) 役割取得の始まりに伴う，自己と異なる他者の内的状態への共感（２，３歳～），(4) 自己と異なる他者のアイデンティティへの理解から，他者の一時的でない慢性的な苦しみへの共感（～児童期後期）に伴って発達する。共感性に基づく他者を傷つけたのではないかという恐れは，他にも多くの研究者が罪悪感を動機づけるものとして捉えている（Baumeiseter, et al., 1994;

Jones, Kugler, & Adams, 1995; Zahn-Waxler & Kochanska, 1990)。

2.　罪悪感の先行条件（antecedents）

公的・私的自己意識理論　Buss（1980）やLewis（1971）によれば，罪悪感は自分が失敗した行動を内省することで喚起されるため内省のしやすさの指標である私的自己意識と関連し，恥は自己の失敗が公になるか公になる可能性がある場合に喚起されるため，他者からの評価を意識しやすい傾向である公的自己意識と関連するという。

認知的評価アプローチ　状況に対する認知的評価を情動の喚起要因とする認知的評価理論（cognitive appraisal theory）によれば，自分のおかれている状況が動機と不一致で自己に原因があり統制可能性は高いと評価し，さらに報酬を得ることに関わっていると評価すると罪悪感が，罰から逃れることに関わっていると評価すると恥が喚起される（Roseman et al., 1996)。

Weiner（1986）の理論によれば，自分の失敗に対して統制可能性が高いものに原因帰属した場合に罪悪感が喚起され，低いものに関して帰属した場合には恥を経験する。統制可能性の他にも原因（自己／他者）と責任（自己/他者)の帰属が情動喚起に関わり，たとえば原因が自己で責任も自己にある場合に罪悪感が喚起される（Parkinson, 1999)。

さらに，自己意識的情動のみに注目し，基準と規則に関する成功もしくは失敗の評価に関する自己帰属により経験する自己意識的情動は異なるという理論も存在する（Lewis, 1992)。自分の行動が，基準と規範（文化，個人によって異なる）に合致しているか，不一致（成功／失敗）であるかを評価し，成功または失敗の原因を外的でなく内的に帰属したときに自己意識情動を経験する。成功を全般的原因（いつも，なんでも）に帰属した場合は“思い上がり”，成功を特殊原因（今回だけ，この状況でのみ）に帰属すると“誇り”，失敗を全般的原因に帰属した場合は“恥”，失敗を特殊原因に帰属すると“罪”を経験する。

自己不一致（self-discrepancy）理論　自己不一致理論とは，理想と現実自

己のズレは不安を喚起し，現実と義務自己のズレは罪悪感を喚起する（Higgins, 1987）という理論である。Carver, Lawrence, & Scheier（1999）によれば，恐怖自己（自分の中で捨て去りたい特性）と現実自己のズレは義務自己よりも不安，抑うつ，罪悪感により強い効果をもつという。具体的には，恐怖自己と現実自己のズレは，たとえ理想―現実，義務―現実のズレの効果を取り除いても不安，罪悪感を低め，主観的満足感を増加させた。また，恐怖自己が現実自己と一致すれば，恐怖自己は不安と罪悪感を喚起し，恐怖自己と現実自己のズレが大きければ，義務自己も不安と罪悪感を喚起することが明らかになった。

3. 罪悪感の帰結（consequence）

適応的機能　罪悪感は，失敗の原因を修復する可能性のある特定の行動へ焦点を当てたとき生じるため，自己の責任を受け入れ，対人間の怒りや敵意を減少させる機能がある（Lewis, 1992）。すなわち，罪悪感には他者に攻撃を加えた場合やルール違反を犯したとき，補償行動を行うことで被害者の報復行為を和らげる役割がある。実際に，罪悪感傾向の高い人は窃盗，薬物摂取，性行動，言語的攻撃，暴力といった行動が抑制される（Mosher, 1979）。また罪悪感には，内在的あるいは外在的な基準や規範を破るような行為を妨げる機能も指摘されている（Darwin, 1872; Mosher, 1979）。

精神病理との関連　1970年代以前の精神分析的理論では，罪悪感は道徳性の発達の重要な要因と考えられ，攻撃性を決定し，抑うつや神経症などの精神病理の重要な原因となると考えられていた（Freud, 1924, Klein, 1948）。Klein（1948）は，罪悪感は，憎しみ，ねたみ，恐怖の感情を感謝，抑うつ，弱い敵意へ変化させるとしている。1970年代以後，Lewis（1971）やKohut（1971）を契機に，恥と精神病理の関係が強調されるようになった。Lewis（1971）によれば，恥は感情障害（特に，抑うつ）につながり，罪悪感は思考障害（たとえば，強迫神経症や妄想型分裂病）の原因となる。未分化の自己を持つ人は，全体的自己が傷つけられる恥を経験しやすく，最終的に

は抑うつを示す。対照的に，はっきりと分化した自己を持つ人は，特に自己と行動の分化が必要な罪悪感経験につながりやすく，自己から場が乖離することを警戒する強迫神経症と妄想型分裂病につながる。また Lewis (1992) によれば，恥は失敗の原因を全体的自己に焦点を当てたとき生じるため，自己否定や自己への怒りを喚起し，さらに（その状況に存在する）他者にも怒りが向かいやすい。こうした怒りには自己防御的機能があり，恥は回避行動だけでなく，防御的，報復的怒り，外的に責任を投影する傾向と関係するという。また Lewis (1992) は，抑うつと恥では失敗への帰属様式（内的，全体的，安定）が類似しており，ある状況の結果として恥と抑うつは一方かその両方が経験され，結合するとしている。

我が国では，Benedict (1946) の“菊と刀”への反論として作田 (1967) 以来多くの研究者が罪悪感および恥と精神病理の関係について理論を述べている（土井，1971; 井上，1977; 岡野，1998; 鑪，1998; 内沼，1997）。井上 (1977) によれば，個別的罪（仲間からの信頼を裏切ることなど）は所属集団（たとえば，農村，天下・国家）からの孤立，普遍的罪（盗みなど）は準拠集団（一定の態度や行動をとるときによりどころとする集団）からの孤立に基礎づけられる。なお，恥は，公恥，私恥，羞恥に区別され，理想より現実の自己が劣っているときに意識される。公恥は所属集団からの劣位，私恥は準拠集団からの劣位，羞恥は所属集団の一員としての自己と準拠集団の一員としての自己とのズレによって生じる。また，内沼 (1997) は，“羞恥”→“恥辱”→“罪”の倫理的推移を述べ，被害者意識，加害者意識を持つ対人恐怖症と罪悪感の関係を説明している。対人関係で“間”に困惑し，対人緊張による赤面を経験すると羞恥心を経験するが，赤面を何度も経験すると赤面することが怖くなり，恥辱（不適応感や自己懐疑の念などの無力感，受身性の意識）に変化する。恥辱を経験すると，自分の恥辱がさらしものにされているという被害者意が生まれる。すると自分をさらし物にする人たちを見返そうとするため，攻撃性に基づく加害者意識が芽生え，その攻撃性への罪の意識が生じる。そうした自分を多く隠そうとす

ることによって，さらに後ろめたさを経験する。そのとき，自分が犯罪者であるとか，自分の存在自体が罪であるなどと考え，視線をさけるようになるという。

認知・行動・生理　罪悪感を経験したときに自覚される特徴は，Tangney, et al.（1996）が明らかにしている。具体的には，自分がいやになる，自分に腹が立つ，自分の気持ちに打ち勝とうとする，体が小さくなった気がする，他者から孤立したように感じる，顔が赤くなる，ドキドキする，道徳規範を破ったと感じる，責任を感じる，自分自身の考えに注意が向かう，償いをしたくなる，後悔するといったことを経験する。

第3節　罪悪感の測定

罪悪感に関する理論について述べてきたが，各理論はどの程度まで検証できているのだろうか。理論を検証するために，これまで質問紙法，投影法，行動指標など多くの手法を用いて罪悪感は測定されてきた。そこで，本章ではまず測定方法を概観し，各研究で得られた知見が理論との整合するのかどうかを次節で確認したい。

1.　質問紙法

質問紙法には，測定する罪悪感の内容が状態（state）であるか特性（trait）であるかという観点と，質問項目の形式（人格形容詞，行動記述など）による違いによる分類が考えられる。以下，罪悪感状態，罪悪感特性別に主要な測定尺度を概観する。

罪悪感状態を測定する尺度　罪悪感の状態を測定する尺度としては，GI-state（Kugler & Jones, 1992）や PGI-state（Otterbacher & Munz, 1973）があげられる。GI-state は，たとえば“私は，今のところこれまで自分のしたことに特に罪悪感を感じていません”，“私は，最近深く後悔することをしました”，“私は，近頃自分自身と自分のしたことに対して気分が良いです”など最近の状態を質問する形式をとっている。

情動を表す形容詞で罪悪感を測定する質問紙としては，Differential Emotions Scale（DES; Izard, 1972）の10因子に含まれる下位因子（guilt；3 項目，5 点尺度；やましい（guilty），気がとがめた（blameworthy），後悔した（repentant））や Affects Balance Scale（ABS: Dergatis, 1975）の 8 因子（40項目，5 点尺度）に罪悪感に関する項目として悔やんだ（regretful），気がとがめた（blameworthy），恥ずかしい（ashamed），やましい（guilty），後悔した（remorseful）などが存在する。

罪悪感特性を測定する尺度

人格形容詞　Personal Feelings Questionnaire-2（PFQ-2: Harder & Zalma, 1990：16項目，4 点尺度）は，感情を表す形容詞に関してどの程度継続的に経験するかについて評定させる質問紙である。恥は10項目（困惑した，ばかげた，おろかな，子供っぽいと感じる，絶望し混乱した，赤面した，笑われていると感じる，他人に嫌われていると感じる），罪悪感は 6 項目（おだやかな罪悪感，人を傷つけたのではないかという心配，激しい罪悪感，後悔した，自分のしたことに批判を受けてしかるべきだと思う，良心の呵責）によって測定される。

Adapted Shame and Guilt Scale（ASGS: Hoblitzelle, 1987：24項目，点尺度）は，罪悪感（12項目：不道徳な，不品行な，過失を犯した，不適切な，不作法な，道義に反するなど）および恥（16項目）：困惑した，恥じた，非難された，やましい，落ち込んだなど）を測定する質問紙である。ただし，罪悪感と恥でオーバーラップが 4 項目存在する。

行動記述式　GI-trait（Kugler & Jones, 1992；5 点尺度，20項目）は，“思い出せる範囲において罪悪感と自責の念が私の人生の一部分であった”，“私は，しばしば強い後悔の念を持ちます”，“たびたび私は自分のしたことで自分自身がいやになります”などの項目に対して自分にあてはまるかどうかを回答する質問紙である。

IGQ-67（O'Connor, Berry, Weiss, Bush, & Sampson, 1997）は，生存者（他人よりも優れることで，人を傷つける），分離（愛する人から離れたり

裏切ったりすることで傷つける)，omnipotence（他人の幸福に責任を感じる)，自己嫌悪（親切に出来なかったことや親を拒否したりといった否定的自己評価）の4因子を5点尺度で測定する尺度である。

Revised Mosher Guilt Inventory（Mosher, 1988)は，114項目（Sex Guilt：50項目，Hostility：42項目，Guilty Conscience：22項目)からなり，7点尺度で測定する。“もし銀行強盗をすれば，私は捕まるだろう”，“私は，自分の罪のすべてを後悔している”，“性的な本は，すべて罰せられるべきだ”といった項目からなる。

Dimension of Conscience Questionnaire（DCQ; Johnson, Danko, Huang, Park, Johnson & Nagoshi, 1987）は，30のシナリオ（Johnson, Kim, & Danko, 1989）に対して“快—不快（good or bad)”の5段階評定させる質問紙である。これまでGore & Harvey（1995）が信頼・誓いの違反（親友に約束をしていたが，それを破ったとき等)，他者への危害（助けることができたのに，困っている人を助けることができなかったとき等)，客観的な罪（おつりをもらいすぎたとき等）という3因子であることを示している。

Test of Self Consciousness Affect（TOSCA; Tangney, Wagner, & Gramzow, 1989）は，Lewis（1992）などが提唱した罪悪感と恥に関する原因帰属理論に基づき，仮想シナリオにおける罪悪感，恥，無関心，誇りなどの反応を測定するものである。10の否定的出来事に対する恥，罪悪感，外在化，無関心反応と5の肯定的出来事に対する恥，罪悪感，α誇り（自己)，β誇り（行動）を測定する。いずれの反応も5点尺度で測定し，反応ごとに15のシナリオの合計得点を算出する。TOSCAは，PFQ-2などの研究で恥と罪悪感の相関が高いという結果をうけ，1つの状況でさまざまな情動が引き起こされることを前提として作成されていることが特徴である。

攻撃性，犯罪に対する罪悪感の測定　Buss & Durkee（1957）は，攻撃性尺度の中で攻撃性に対する罪悪感を下位尺度として取り入れている。また，Blame Attribution Inventory（BAI: Gudjonsson, 1984）は犯罪に対する罪悪感を測定する48項目からなる尺度で，主として外在化（12項目：犯罪の犠

牲者は，犯罪の犠牲になってしかるべき理由がいつもある），心理要因（11項目：犯罪は，精神病が原因で起こった），罪悪感（11項目：自分が行った犯罪のために自分自身をいやに思う）という 3 因子からなる。

本邦における質問紙法の研究　残念ながら国内では，罪悪感に焦点を当てた質問紙法による研究はほとんどなかった。そのため，国内で罪悪感特性を測定する尺度を開発することが望まれ，近年 SGI（有光・今田，1999; 37項目，4 点尺度）が開発された。SGI は，他傷（例：友人を裏切ったとき），他者配慮不足（例：お年寄りに席を譲れなかったとき），利己的行動（例：他人のお菓子を食べたとき），他者への負い目（例：親に金銭的負担をかけていると思ったとき）が因子としてあげられている。SGI は，罪悪感経験を反映し，内容的妥当性が高く，日本人を対象とした罪悪感経験の調査から項目が作成されているため，文化的背景が明確である点が優れている。SGI の他に，本邦独自の尺度としては，後藤（1999）が自身の内観経験から阿闍世的懺悔心に関する質問紙を作成し，その構造を探求している。

欧米の尺度の邦訳としては内罰尺度（EPPS の下位尺度；肥田野・岩原・岩脇・杉村・福原, 1970）や Mosher 強制選択法質問紙（益谷, 1998），TOSCA，PFQ-2，GI，Mosher（佐藤・三宅, 1999），GI（石川・内山, 1999）が存在する。また，Müller Anger Questionnaire の邦訳（大竹・島井・曽我・宇津木・山崎・大芦・坂井・西・松島・嶋田・安藤, 2000）における下位尺度では，攻撃性への罪悪感が測定できる。

2. 投　影　法

益谷（1998）によって，文章完成法テストによる敵意に対する罪悪感の測定（12項目）が試みられている。たとえば，“怒りがこみ上げてきた時……”，“戦争で人を殺すことは……”，“言い争った後……”といった文章に続けて自分の思うがまま短文を作成し，その反応を測定する。Ohe（1966）も，SCT を用いて罪悪感を測定し，宗教の信者であるかどうかや非行の有無による罪悪感特性の違いについて明らかにしている。また，P-F ス

タディ（住田・林・一谷, 1987）でも攻撃性に対する内罰傾向を測定することができる。

3. 観 察 法

観察法による罪悪感の測定は，罪悪感を喚起する状況を設定しそのときの表出される行動を測定するなどして，主に幼児の情動発達研究において行われている。たとえば，Kochanska, DeVot, Goldman, Murray, & Putnam (1994) ではおもちゃにさわってはいけないと言われた子供が，母が部屋から退出したあと，見るだけ，遊ぶ，他のことをするの3つの行動のどれを顕著に示すかが観察された。その結果，母親の評定尺度（誤った行動をしたときに，どのような行動を子供がとるか）における罪悪感（affective discomfort after wrongdoing）と部屋における子供の“違反行為”には負の相関があることが示されている。

Depalma,Madey, & Borschein（1995）は，解けないアナグラム問題に解答させ，回答した数を指標としている。その結果，悪いことをしたときに補償行動をする人は，逆にだます傾向にあるということが明らかになった。その他の行動指標としては，Lewis, Stranger, & Sullivan（1989）は，deceptionの研究で罪悪感の兆候として伏し目，笑いのなさ，体の緊張の観察を行っている。

第4節　優れた罪悪感の尺度とは—理論整合性の確認

これまで罪悪感に関する理論と様々な測定法について述べてきた。ここでは特に質問紙法に注目し，主として罪悪感の認知的理論から演繹される変数間関係が，どの尺度によって最もよく実証されているかを検討する。すなわち，諸理論との整合性の観点から各質問紙の構成概念妥当性について検討したい。罪悪感に関する諸理論からは，以下に示すように罪悪感と恥，攻撃性，精神病理反応などの変数との関連が予想される。

1. 罪悪感，恥は，多くの特徴を共有し，ともに自己意識の高まりによる否

定的な情動経験であり，同時に経験することもある（Lewis, 1971; Lewis, 1992）。したがって，罪悪感を経験しやすい人は恥も経験しやすいため，正の相関を示す。

2. 罪悪感は内省的情動であるため私的自己意識と正の相関，外的帰属傾向とは負の相関を示す（Buss, 1980; Lewis, 1971）。
3. 罪悪感は他者への攻撃性を抑制する機能があるため，罪悪感は攻撃性と負の相関を示す（Lewis, 1992; Tangney, et al., 1995）。
4. 罪悪感は他者への共感により喚起されるため，罪悪感特性は他者への共感性と正の相関を示す（Hoffman, 1984; Tangney, et al., 1995）。
5. 罪悪感が一時的なもので適応的に機能する場合，精神病理とは相関を示さない（Lewis, 1992; Tangney et al., 1995）。しかし，慢性的に長期間にわたって罪悪感を経験する人は，強迫神経症，妄想型分裂病（Lewis, 1971）もしくはうつ症状を示す（Klein, 1948）。

Table 1 には，主要な尺度について諸理論との整合性を示す各変数との測定の有無と相関の有無についてまとめた。なお，質問紙法を用いて罪悪感と恥を測定した場合，罪悪感と恥には高い正の相関関係が認められる。そのため，多くの研究では罪悪感（恥）と性格特性，精神病理との関係を正確に測定するため偏相関係数を算出し，相関の高い恥（罪悪感）の影響を取り除いた相関係数により罪悪感の特徴を論議をしている。Table 1 では，恥の影響を取り除いた場合（偏相関）と取り除かなかった場合（単相関）の結果を示した。

罪悪感特性と自己意識の単相関では，PFQ2 を除いて公的・私的自己と関連が認められた（有光・今田, 1999; Harder, Cultler, & Rockart, 1992; Kugler, & Jones, 1992; Tangney, et al., 1995）。恥特性の影響を取り払った場合，理論上予測される罪悪感特性と私的自己意識との関連は，有光（2001）および Harder et al.（1992）を除いて認められていない。また，外的帰属は罪悪感特性と無相関であるか（Tangney, et al., 1995），予測とは逆に正の相関が認められる傾向にあった（Harder & Zalma, 1990; O'Connor, et al., 1997）。

Table 1　様々な尺度によって測定された罪悪感と性格特性，精神病理反応の相関関係[a,b)]

尺度名	著　　者		罪悪感	恥	私的自己意識	公的自己意識	外的帰属	攻撃性	共感性	うつ傾向	不安	精神病傾向	強迫神経症	妄想観念
PFQ2–guilt	Harder, et al.（1992）	単相関	＋	＋	○	＋	○	＋		＋	＋	＋	＋	＋
	Harder, et al.（1992）	偏相関			○	＋	○	＋		＋	＋	＋	○	○
GI–trait	Kulger & Jones（1992），Jones & Kugler（1993）	単相関	＋	＋	＋	＋		＋		＋	＋			
	O'Connor, et al.（1999）	偏相関						＋		＋	＋	＋	＋	＋
TOSCA–guilt	Tangney（1995），Tagney, et al.（1995）	単相関	＋	＋	＋	＋		－	＋	＋	＋	＋	＋	○
	Tangney（1995），Tagney, et al.（1995）	偏相関			○	○		－	＋	○	○	○	○	○
IGQ–survivor	O'Connor, et al.（1997）[c)]	単相関	＋	＋			＋			＋				
	O'Connor, et al.（1999）[c)]	偏相関						＋		＋	＋	＋	＋	＋
S G S–total	Klass（1987）	単相関	＋							＋				
	該当研究なし	偏相関												
DCQ–total	Johnson et al.（1987）	単相関		＋								－		
	該当研究なし	偏相関												
SGI–total	有光・今田（1999）	単相関			＋	＋		○	－	＋	＋			
	有光（2001）	偏相関		＋	＋	○			－	○	○			

a）○は無相関，＋は正の相関，－は負の相関を示す．空白は，当該尺度では測定されていないことを示す．
b）偏相関は，恥特性を制御変数として算出されたものである．
c）下位因子によって若干結果が異なる．ここでは，生存者因子の結果を表示した．

TOSCA を用いた場合，罪悪感特性と攻撃性，対人共感性の関連では，単相関，偏相関のいずれの場合でも負の相関が認められた（Tangney, 1995; Tangney, et al., 1995）。しかし，PFQ2，GI，IGQ によって罪悪感を測定した場合，恥特性の影響を除去したとしても攻撃性とは正の相関が認められた（Harder, et al., 1992; O'Connor, Berry, & Weiss, 1999）。

罪悪感特性と精神病理反応との関連では，PFQ2，GI，IGQ を用いた研究においてうつ傾向，不安，精神病傾向，強迫神経症，妄想観念と正の相関が認められた（Harder, et al., 1992; O'Connor, et al., 1999）。しかし，TOSCA を用いた研究では，単相関では精神病理反応と正の相関が認められるが，恥特性の影響を除去した場合は無相関（Tangney, et al., 1995）であるか，負の相関が認められた（O'Connor, et al., 1999）。

以上のように，TOSCA とそれ以外の尺度では，罪悪感特性と攻撃性および精神病理反応の関係が全く逆の形で認められた。TOSCA は様々な状況において補償行動を行うかどうかなど自己の否定的評価とは関連しない罪悪感の適応的機能を測定し，PFQ2 や GI は自分ことを“罪深い人間である”など否定的自己評価を含む慢性的な罪悪感を測定していると考えられる（Ferguson, & Crowley, 1997）。したがって，PFQ2 などで測定される慢性的な罪悪感は精神病理と関係し，TOSCA で測定される一時的，適応的罪悪感は精神病理と関係しないという結果が得られたものと思われる。このような慢性罪悪感および適応的罪悪感と精神病理との関連は，Quiles & Bybee（1997）による研究でも追認されている。したがって，Table 1 で取り上げた尺度は SGS と DCQ を除いて恥を制御することで罪悪感の純粋な特徴を取り出し，諸理論との整合性を示すことにある程度は成功していると言えるだろう。ただし，尺度によって精神病理との関連が異なるため，研究を行う際には罪悪感のどの特徴を調べるのかを考慮する必要がある。また，尺度によっては罪悪感との関係性が明確にされていない箇所も多く（Table 1 参照），今後各尺度に関してさらなる構成概念妥当性の検討が待たれる。さらに，質問紙によって測定された罪悪感特性の高い人が実際に適応反応を

示すかどうかなどの基準関連妥当性の検討もほとんど行われていないため，研究を行う必要がある。質問紙法自体の限界としては，内沼（1997）などが指摘するような恥から攻撃性，攻撃性から罪悪感という情動の移り変わりを測定できない点があげられる。今後，そうした情動間の相互作用を実証する必要もあるだろう。

第5節　今後の展望

これまで述べてきたように，罪悪感は，恥や精神病理，その適応的機能について明確にされてきた。しかし，今後残された課題も存在する。本節では，罪悪感を基本的情動の中にどのように位置づけるかという問題と，研究の立ち後れている日本での課題について述べる。

1.　罪悪感は基本的情動なのか

罪悪感と恥は情動として異なる特徴，機能をもつため，いわゆる基本的情動（basic emotion; Izard, 1991）の一つとして見なされてきた。罪悪感が基本的情動であるかどうかは，情動研究においては基本的情動の種類の決定に関わり，罪悪感研究においては罪悪感の文化間普遍性に関わるため重要な問題である。しかし，罪悪感と恥の喚起状況は類似しており，同時に経験することもある（Tangney, 1992）。また，恥には特異的な表情があるが，罪悪感には存在しない（Keltner & Buswell, 1996）。さらに，Harder & Zalma（1990）は，恥と罪悪感を区別する測度の開発へ尽力したが，恥と罪悪感の相関は非常に高く（r=.52），うまく恥と罪悪感を区別することができなかった。そのため，恥が基本的情動であり（Ekman & Friesen, 1975），その発達は罪悪感より先行し罪悪感に分化する（Erikson, 1959; Piers & Singer, 1971）と考え，罪悪感と恥を区別しない立場の研究者も存在する。また，Zahn-Waxler & Robinson（1995）の双生児研究では，恥は遺伝の影響を受け，罪悪感は遺伝要因からの影響は受けず環境の影響を受けることが明らかになっている。したがって，ある情動喚起には生得的に備わる特

異的な生理・身体的反応が必要であるというジェームズ説（James, 1890; Ekman, & Friesen, 1975）に従えば，罪悪感は基本的情動であるという証拠は得られていないことになる。しかし，罪悪感に特異的な生理・身体反応が見られない点に関しては，罪悪感は表出を押し隠す情動であるためと考えることができる。また，罪悪感喚起状況で恥の表出である紅潮を経験することがあり，恥と罪悪感の違いを不明瞭にさせているが，その紅潮はある行為に対する罪悪感ではなく，他者が自分自身の罪悪感について考えていることや知っていること（Darwin, 1872）であると考えることも可能である。いずれにせよ，ジェームズ派の立場に立つ場合，今後罪悪感に特異的な身体内での変化が発見されるかどうかが基本的かどうかに関わる重要な課題となるだろう。

2.　日本における罪悪感研究の必要性について

欧米では，罪悪感に関する理論の科学的実証がかなり進んでいると考えられる。しかし，日本人を対象とした研究は少なく，その成果は欧米の先行研究に対して乏しい。特に日本では SGI の研究（有光・今田，1999）において，欧米の罪悪感尺度にも相当するものがない他者への負い目因子が見いだされるなど，罪悪感の文化差が指摘されている。文化差の一因として，他者への負い目が日本人青年では重視され，欧米の研究では軽視されている罪悪感喚起状況である可能性がある。たとえば，日本人は昔受けた親切に対して返礼はしなくてはならないといった義理を重んじるが，アメリカ人はそうした恩義を（日本人のように）銀行の借金返済のような厳格さをもって返さなくてはならないとは考えない（Benedict, 1946）という。この義理に関する日米の違いを考慮すれば，負い目に関する項目の有無，因子構造の違いが理解できる。今後は，こうした文化差を考慮しながら日本人の罪悪感の特徴を明確にする必要があるだろう。

罪悪感に浪費，性行動，利己的な攻撃といった行動にチェック機能能があることを実証できれば，学校教育において重視されている道徳教育へ新

たな科学的知見を加えることになるだろう。さらに希望を述べるならば，罪悪感研究によって日本人青年の問題行動の改善への手がかりを得ることができるかもしれない。また，慢性的な罪悪感が健康を損ねることから，臨床心理学，健康心理学の立場から罪悪感に関する実証的研究を行っていく必要もあるだろう。

引 用 文 献

有光興記　2001　罪悪感，羞恥心と性格特性の関係　性格心理学研究，**9**, 71–86.

有光興記・今田　寛　1999　特性罪悪感尺度作成の試み　日本教育心理学会第41回大会発表論文集, 250.

Baumeister, R. F., Stillwell, A. M., & Heatherton, T. F.　1994　Guilt: An interpersonal approach.　*Psychological Bulletin*, **115**, 243–267.

Benedict, R.　1946　*The chrysanthemum and the sword.*　Boston: Houghton Miffin.

Buss, A. H.　1980　*Self-consciousness and social anxiety.*　San Francisco: Freeman.

Buss, A. H., & Durkee, A.　1957　An inventory for assessing different kinds of hostility.　*Journal of Consulting Psychology*, **21**, 343–349.

Carver, C. S., Lawrence, J. W., & Scheier, M. F.　1999　Self-discrepancies and affect: Incorporating the role of feared selves.　*Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 783–792.

Darwin, C.　1872　*The expression of the emotions in man and animals.*　Chicago: University of Illinois Press.

Depalma, M. T., Madey, S. F., & Bornschein, S.　1995　Individual differences and cheating behavior: guilt and cheating in competitive situations.　*Personality and Individual Differences*, **18**, 761–769.

Derogatis, L.R. 1975　*Affects Balance Scale.* Investigación Clínica Psicométrica: Riderwoord, MD.

土居健郎　1971　「甘え」の構造　弘文堂

Ekman, E. H., & Friesen, W. V.　1975　*Unmasking the face.*　Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Erikson, E. H.　1959　Identity and the life cycle.　*Psychological Issues Monograph*, I (Whole No. 1).　New York: International University Press.

Ferguson, T. J., & Crowley, S. L.　1997　Measure for measure: A multitrait-multimethod analysis of guilt and shame.　*Journal of Personality Assessment*, **69**, 425-441.

Freud, S.　1924　*The economic problem of masochism*　(Standard Edition, v. X IX).　Lon-

don: Hogarth.

Gore, E. J., & Harvey, O J.　1995　A factor analysis of a scale of shame and guilt: dimensions of conscience questionnaire.　*Personality and Individual Differences*, **19**, 769–771.

後藤智子　1999　罪悪感の二様態について――エディプスと阿闍世――　京都大学教育学部紀要，**44**, 256–268.

Gudjonsson, G. H.　1984　Attribution of blame for criminal acts and its relationship with personality.　*Personality and Individual Differences*, **5**, 53–58.

Harder, D. W., & Zalma, A.　1990　Two promising shame and guilt scales: A construct validity comparison.　*Journal of Personality Assessment*, **55**, 729–745.

Harder, D. W., Cutler, L., & Rockart, L.　1992　Assessment of shame and guilt and their relationships to psychopathology.　*Journal of Personality Assessment*, **59**, 584–604.

肥田野直・岩原信九郎・岩脇三良・杉村　健・福原眞知子　1970　EPPS性格検査手引　日本文化科学社

Higgins, E. T.　1987　Self-discrepancy: A theory relating self and affect.　*Psychological Review*, **94**, 319–340.

Hoblitzelle, W.　1987　Differentiating and measuring shame and guilt: The relation between shame and depression.　In H. B. Lewis（Ed.）, *The role of shame in symptom formation*.　Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Pp. 207–235.

Hoffman, M. L.　1984　Empathy, its limitations, and its role in a comprehensive moral theory.　In Gewirts, J. & Kurtines, W.（Eds.）, *Morality, moral development, and moral behavior*.　New York: Wiley. Pp. 283–302.

井上忠司　1977　「世間体」の構造　日本放送出版協会

石川隆行・内山伊知郎　1999　共感性・社会的責任が大学生の罪悪感に及ぼす影響　日本心理学会第63回大会発表論文集，923.

Izard, C. E.　1972　*The face of emotion*.　New York: Appleton-Century-Crofts.

Izard, C. E.　1991　*The psychology of emotions*.　New York: Plenum Press.

James, W.　1890　*The principles of psychology*.　New York: Holt.

Johnson, R. C., Danko, G. P., Huang, Y. H., Park, J. Y., Johnson, S. B., & Nagoshi, C. T.　1987　Guilt, shame, and adjustment in three cultures.　*Personality and Individual Differences*, **8**, 357–364.

Johnson, R. C., Kim, R. J., & Danko, G. P.　1989　Guilt, shame, and adjustment; A family study.　*Personality and Individual Differences*, **10**, 71–74.

Jones, W. H., & Kugler, K.　1993　Interpersonal correlates of The Guilt Inventory.　*Journal of Personality Assessment*, **61**, 246–258.

Jones, W. H., Kugler, K., & Adams, P. 1995 You always hurt the one you love: Guilt and trasgressions against relationship partners. In J. P. Tangney & K. W. Fisher (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride.* New York: Guilford Press. Pp. 301–321.

Klass, E. T. 1987 Situational approach to assessment of guilt: Development and validation of a self-report measure. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment,* **9**, 35–48.

Klein, M. 1948 On the theory of anxiety and guilt. *International Journal of Psycho-Analysis*, **29**.

Kochanska, G., DeVet, K., Goldman, M., Murray, K., & Putnam, S. 1994 Maternal reports of conscience development and temperament in young children. *Child Development*, **65**, 852–868.

Kohut, H. 1971 *The analysis of self.* New York: International Universities Press.

Kugler, K. E., & Jones, W. H. 1992 On assessing and measuring guilt. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 318–327.

Lewis, H. B. 1971 *Shame and guilt in neurosis.* Madison, CT: International Universities Press.

Lewis, M. 1992 *Shame: The exposed self.* Free Press.

Lewis, M., Stranger, C., & Sullivan, M. W. 1989 Deception in three-year-olds. *Developmental Psychology*, **25**, 439–443.

Lutwak, N., Ferrari, J. R., & Cheek, J. M. 1998 Shame, guilt, and identity in men and women: the role of identity orientation and processing style in moral affects. *Personality and Individual Differences*, **25**, 1027–1036.

Lynd, H. M. 1958 *On shame and the search for identity.* New York: Harcourt Brace Javanovich, Inc.

益谷　真　1998　敵意に関する罪感情の測定　日本心理学会第62回大会発表論文集, 66.

Mosher, D. L. 1979 The meaning and measurement of guilt. In C. E. Izard (Ed.), *Emotions in personality and psychopathology.* New York: Plenum Press. Pp. 105–129.

Mosher, D. L. 1988 Revised Mosher Guilt Inventory. In C. M. Davis & W. L. Yarber (Eds.), *Sexuality-related measures: a compendium.* Lake Mills, IA: Graphic Publications. Pp. 290–293.

O'Connor, L. E., Berry, J., Weiss, J., Bush, M., & Sampson, H. 1997 Interpersonal guilt: The development of a new measure. *Journal of Clinical Psychology*, **53**, 73–89.

O'Connor, L. E., Berry, J., & Weiss, J.　1999　Interpersonal guilt, shame, and psychological problems.　*Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 181–203.

Ohe, M.　1966　Psychological study of guilt feeling.　*Japanese Psychological Research*, **8**, 103–113.

岡野憲一郎　1998　恥と自己愛の精神分析　岩崎学術出版社

大竹恵子・島井哲志・曽我祥子・宇津木成介・山崎勝之・大芦　治・坂井明子・西信雄・松島由美子・嶋田洋徳・安藤明人　2000　日本版 Muller Anger Coping Questionnaire（MAQ）の作成と妥当性・信頼性の検討　感情心理学研究，**7**, 13–24.

Otterbacher, J. R., & Munz, D. C.　1973　State-trait measure of experiential guilt.　*Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **40**, 115–121.

Parkinson, B.　1999　Relations and dissociation between appraisal and emotion ratings of reasonable and unreasonable anger and guilt.　*Cognition and Emotion*, **13**, 347–385.

Piers, G., & Singer, M. B.　1971　*Shame and guilt: A psychoanalytic and cultural study.*　New York: Norton.

Quiles, Z., & Bybee, J.　1997　Chronic and predispositional guilt: Relations to mental health, prosocial behavior, and religiosity.　*Journal of Personality Assessment*, **69**, 104–126.

Roseman, I. J, Antoniou, A. A., & Jose, P. A.　1996　Appraisal determinants of emotions: Constructing a more accurate and comprehensive theory.　*Cognition and Emotion*, **10**, 241–277.

作田啓一　1967　恥の文化再考　筑摩書房

佐藤美恵子・三宅和夫　1999　日本人の恥と罪の自己意識の特徴――アメリカ人との比較を通して――　日本心理学会第63回大会発表論文集, 706.

住田勝美・林　勝造・一谷　彊　1987　日本版ローゼンツァイク P-F スタディ解説――基本手引き――＜1987年版＞　三京房

Tangney, J. P.　1992　Situational determinants of shame and guilt in young adulthood.　*Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 199–206.

Tangney, J. P.　1995　Shame and guilt in interpersonal relationships.　In J. P. Tangney & K. W. Fisher（Eds.）, *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride.*　New York: Guilford Press. Pp. 114–139.

Tangney, J. P., Wagner, P., & Gramzow, R.　1989　*The Test of Self-Conscious Affect (TOSCA).* Fairfax, VA: George Mason University.

Tangney, J. P., Burggraf, S. A., & Wagner, P. E.　1995　Shame-proneness, guilt-proneness, and psychological symptoms.　In J. P. Tangney & K. W. Fisher（Eds.）, *Self-*

conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride. New York: Guilford Press. Pp. 343–367.

Tangney, J. P., Wagner, P. E., Fletcher, C., & Gramzow, R. 1992 Shamed into anger? The relation of shame and guilt to anger and self-reported aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 669–675.

Tangney, J. P., Miller, R., Flicker, & Barlow, D. H. 1996 Are shame, guilt, and embarrassment distinct emotions?. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1256–1269.

鑪　幹八郎　1998　恥と意地—日本人の心理構造　講談社現代新書

内沼幸雄　1997　対人恐怖の心理—羞恥と日本人　講談社学術文庫

Weiner, B. 1986 *An attributional theory of motivation and emotion.* New York: Springer-Verlag.

Zahn-Waxler, C., & Kochanska, G. 1990 *The origins of guilt.* In R. A. Thompson (Ed.), The Nebraska symposium on motivation 1988: Socioemotional development (Vol. 36). Lincoln: University of Nebraska Press. Pp. 182–258.

Zahn-Waxler, C., & Robinson, J. 1995 *Empathy and guilt: Early origins of feelings of responsibility.* In J. P. Tangney & K. W. Fisher (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride.* New York: Guilford Press. Pp. 143–173.

Summary

Guilt: An Overview of Theory and Research

Kohki Arimitsu
Department of Psychology, the Faculty of Humanities and Human Sciences, Hiroshima Shudo University

This article explores the diverse theoretical perspectives and the empirical research concerned with guilt（'zaiakukan' in Japanese）. Guilt may be defined as the dysphoric feelings associated with the recognition that one has violated a personally relevant, moral or social standard. Guilt has an adaptive function when a sense of tension elicited by guilt often serves as a motivation for reparative action.

Theories about guilt were discussed in terms of early origins, antecedents, and consequences. Although guilt is assumed to serve adaptive functions at societal level, clinicians have long identified guilt as potentially problematic for the individual. So, theories about guilt are different whether they expect guilt should be associated with psychopathology or not.

In many research with a paper-and-pencil measure to assess guilt-proneness, the evidence was found to support the view that interpersonal guilt had a positive correlation with shame, private self-consciousness, empathy, and psychological symptoms, and a negative one with aggression. For the future direction, the culture-specific organization of guilt was discussed. This review closes by offering suggestions for the future guilt research in Japan.